人生の目的は 品性を完成するにあり

樋野興夫著
いい覚悟で生きるより

困難、苦難は誰にでも襲いかかるものです。そのとき、
品性は、耐えることで生まれ、行いによって磨かれます。

4 年前に手術した胃がんが再発して、厳しい闘いをしていた 50 代の患者さんが、がん哲学外来を訪ねてこられました。扉を開けたとき笑顔だったのが、とても印象的でした。
「これから治療や薬の副作用は厳しくつらくなるかもしれないけれど、人のためになることがしたい」と強い決意を口にされました。
その澄んだ目を見て、私は言いました。
「人生の目的は品性の完成だからね」
「品性の、完成……」
「今まで自分が生きてきた中で仕事、趣味、いろいろなことをやってきたでしょう。それをあなたという人間の品性として、どうやって完成させればいいのか考えてみてはいかがですか。与えられた使命はひとりひとり全部違います。自分はいったいどういう花かを考える。その花に見合った花を咲かせればいいでしょう」
その患者さんは、残された時間を自分らしく生きるにはどうすればいいのか思い悩んだ末、がん哲学外来メディカルカフェでお芝居を上演するイベントを 計画しました。大の演劇ファンだった患者さんは、同じ病に苦しむ人たちにお芝居でやすらぎを与えたいと考えたのです。舞台に通いつめて親しくなった劇団の役者さんに企画の相談をして、選んだ作品の題材は『葉っぱのフレディ――― いのちの旅』でした。
「葉っぱのフレディ」はアメリカの哲学者レオ・バスカーリ博士が書いた絵本で、1 本の大木に生まれた葉っぱたちの四季を通して、生と死、自分たちはどこから来て、どこへ行くのかという人生といのちの意味を考える名作です。
死とは人生の引っ越しであり、変化することのひとつ。世界も自分も変わり 続け、変わらないものは何ひとつとしてなく、変わることこそごく自然なこと。 その中で、いのちは永遠に続く、という「葉っぱのフレディ」のメッセージは、 この患者さんの思いそのものだったのでしょう。
しかし、このお芝居の完成を待たずに患者さんは亡くなります。
4 か月後、遺志を継いだ家族や劇団員、友人たちは、故人のメモリアル・メ ディカルカフェという場を得て、音楽劇『扉 Ready ~Freddie~ Go!!!』を上演しました。満場の客席は感動の涙と割れんばかりの拍手に包まれました。
患者さんの魂が一緒に舞台を見守り、力づけていたと感じる、あるいは信じる人たちがなんと多かったことか。永遠に続くいのちの意味と死に直面したときのための勇気は、患者さんからの贈り物にほかならなかったのです。
患者さんが最期に選んだ「自分らしく生きること」は、まさに「人のためになること」でした。
「本当にありがたいですね。こうやってみなさんが主人の思いをつないでくださって。なかなかないことだと感謝しています。ありがたい気持ちでいっぱいです。どうやってこの感謝の気持ちをみなさんにこれからお伝えしていけばい いのか今はまだわかりません。それが私の使命になるのかもしれません」
お芝居を娘さんや患者さんのお兄さんたち家族と一緒に観ていた奥さんは、終演後にそう言いました。
そして、患者さんが痛みでつらい中でも最後まで穏やかだった、と聞いた私は、「『品性の完成』に向かって最

後まですごくよくがんばったのですね」と、その品性を讃えました。

「人生の目的は金銭を得るに非ず、品性を完成するにあり」

これは私が尊敬する内村鑑三の言葉です。

人生の目的が「品性の完成」にありとは、いったいどういうことだろうか、と多くの人が首をかしげます。けれど、この意外性のある言葉にふれることで、 病気やさまざまな困難に直面する人が前向きな気持ちになるようです。

ある日のがん哲学外来で、会社に勤めている患者さんが職場での悩みを打ち明けました。

「つらい治療を終えて薬も効いているから、職場に無事復帰しました。医師からもできる仕事はしっかりやっていいと許可が下りたのです。ところが、私が 中心となって進めていた企画はいつのまにか同僚に任されていました。上司に は術後の経過をまめに報告して、すぐ復帰できそうだと話していたから、仕事のフォローをしてくれていると思っていました。裏切られた思いです。ちょっと休んだだけなのに、ちょっと病気になっただけなのに、それががんだったからって……。自分が会社からも人生からも用無しになった気がしてショックでした。これまでどおりの仕事に 戻りたい、と上司に相談しましたが、神様がゆっくりしなさいと言っていると思ってそんなに焦らなくていいから、と腫れものを触るような扱いです。もう二度と、がんになる前の自分には戻れないのでしょうか」

井戸の水をくみ上げるかのように、涙が止まらない様子です。

私 は言いました。

「がんになる前の自分が最高だなんて、誰が決めたんですか? 今の仕事が好きなら続けられたらいいじゃないですか。自分で決める人生は、病気とは関係ありませんよ」

そして、この言葉を贈りました。

「人生の目的は品性を完成するにあり」

品性とは、人格であり、人としての品位です。人生の目的は、仕事の成功や世間の賞賛、ましてや、お金持ちになることではありません。今、自分の目の前にあることに一生懸命取り組み、自分の行いによって人が喜んでくれることによって、初めて品性は磨かれていくものです。

この患者さんに限らず、職場の悩みを持つ人は少なくありません。がんであることを報告したら閑職に異動させられた人。逆に、「これまでどおり仕事をしなさい」と言ってもらえたものの、通院や体調が悪いために仕事を休んだり、 仕事に差し障りが出たりして悩む人。久しぶりに出社した職場で周囲に大げさに気を遣われたり、がんであることを知っているのに、知らないふりをされて傷つく人。みんな悩むのです。

後日、この患者さんからメールをいただきました。

「上司に自分が休んでいた間、迷惑をかけたことを素直に詫びました。仕事をフォローしてくれたことに感謝しました。今の自分にできることは仕事の補佐をすることだと伝えました。すると、『君がいないとうまく進まないことが多 かったから、戻って来てくれてうれしい』と言ってくれたのです! これから、人生の目標とする品性の完成に向けて謙虚に生きていきます」

困難、苦難はがんに限らず誰にでも襲いかかるものです。そのとき、いかに耐えるか。そして、「人のためになる」ことにいかに気持ちを向けられるか。

耐えることで品性が生まれ、品性を磨くことによって希望が生まれます。